

■ サンダー・シング

彼は、インド大陸の宣教師でとても有名な伝道者です。宣教地を目指しネパールの大雪に覆われた山を猛吹雪の中、命からがら歩いていて、そこに倒れている瀕死の老人を見つけました。自分も助かるか助からないかのギリギリの状態でしたが、老人を助けようと思いました。すると、サンダーと一緒に歩いていた人が怒り出し罵声を浴びせました。しかしサンダーは見捨てないわけにはいかないと、老人を助けることを決めました。そしてサンダーに罵声を浴びせた彼は、先に行ってしまうました。サンダーは老人を背負い大汗をかきながら進み、老人はサンダーの背中の中のかさにより助かりました。しばらく歩いていくと、凍死をしている人がいました。それは先ほど去って行った彼でした。サンダーと老人は助かりましたが、彼は死んでしまいました。さて私たちは正しい良心を持ち、正しい目線で判断をしているのでしょうか？間違った判断が自らの人生を失うことがあります。

■ 律法とは

パウロはテモテへ任せられた教会を牧会するようにと、2回にわたって手紙を書きました。教会は多くの問題を抱えていました。当時、偽教師がいて間違った教を言い広め、また神学論争という問題がありました。律法を自らの正当性を相手に示すために用いていました。律法はアダムとエバが罪を犯す前からあったのでしょうか？答えはノーです。罪を犯す前は、悪が無い為、律法は必要ありませんでした。人々の罪が増大し、人の心が罪だらけになった状況で神様は律法（十戒）をモーセに与え、私達が神の命令に背いていることを教えられました。すでに律法は、私たちに与えられている福音の入り口だったのです。福音とは、「神様がいて、私たちが罪を犯し、その罪のために十字架に架かって死んで下さった。それを信じて悔い改めたら赦される。」という事です。罪を知るところから福音の入り口が始まります。律法は自分の正しさを示したり、正しく生きていくことを正当化するものではありません。私達が神様の前に罪人であることを知るためです。罪を知った者だけが神の御言葉に頼（ぬか）ずき、罪を告白し、自分に負い目のある人を赦す決断をすることができます。そして赦された者だけが、互いに許し合うことができ人と人との間に和解が起こり、神様と人との和解にまでつながるのです。これが神様の福音です。

■ I テモテ 1:5, 18 ~ 20

テモテの手紙は「この命令は」から始まり、「この預言に従って…」とあります。この預言とはパウロに対してされた預言と同じでした。パウロはダマスコの途上で神様に会い「私に従って来なさい。」という命令を受け、多くの弟子に祈られました。パウロの使命は、預言として語られていきました。異邦人のテモテにも同じように「この使命に立っていきなさい。」と神様は語られました。これは召しと召命です。パウロはテモテへ「この預言に従って私はあなたに【この命令】を委ねます。」と書いています。【この命令】とは 1 章 5 節の【この命令】、「きよい心と正しい良心と偽りのない信仰」ということ、旧約聖書に出てくる十戒という律法です。ではきよい心はどうしたら与えられるのか、それは外側からではないとパウロは何度も伝えています。ユダヤ人は、身は外側から汚れると思っていました。しかし、イエス様は「外側にあるものが汚すのではなく、内側にあるものが私たちに汚す、それはパン種のようなものである」と語られました。きよい心は、律法により罪を知ることからスタートします。私たちは律法を通してもう一度、自分の罪を知ることができます。罪を知ると初めてきよい心が与えられます。きよい行いが自分をきよくするものではありません。自分が赦されたことを知り、初めて正しい良心が出てくるのです。パウロが伝えた「偽りのない信仰」とは、迫害の中でも神を信じ神を愛そうとする行動、うわべではない心の信仰です。

■ 【成熟とは】～良い物と悪い物とを見分ける感覚～

ヘブル人 6 : 1 『ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、【成熟】を目ざして進もうではありませんか。』この箇所にある【成熟】とは「良い物と悪い物を見分ける感覚」です。何が良いことで神に受け入れられ、何が悪いことなのかをわきまえること、それが【成熟】です。ヘブル 4 : 12 『神の言葉は生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心の色々な考えやほかりごとを判別することができます。』物事の判断は、御言葉によりのみ判断することができます。聖書の福音の原点が何千年にもわたり

変わらないのは、正しい良心によるものだからです。そして、私達は神に似るようにつくられているので、神が御言葉を通して私たちに語られる時、わかります。これが正しい良心です。

しかし、私達の正しい良心を壊す者がいます。「あの人嫌い。」という思いです。その途端に目標は愛ではなく間違った律法となります。【成熟】とは、愛かどうかを分別させます。私達が成長し【成熟】すると、愛なのか、愛では無いものなのかがよくわかります。サンダーが、雪山で遭難者を見つけた時、放っておくことは愛でないことがわかりました。愛の行動がサンダーに勇気を与え、元気を与えました。誰かのために生きようとする愛は艱難をも耐え抜く能力が与えられます。しかし一人で去って行った彼は孤独に苛まれて、間違った判断故に死んでしまいました。雪山の遭難は、力尽きるのではなく諦めることで起こります。ユダとパウロの違い、またダビデとサウロの違いはイエス様の元に帰ったか、帰らなかったかの違いです。悪魔は私達をいつも一人にしようとします。正義を与え、間違った言葉により孤立させようとします。反対にイエス様は私達と一緒にしようとしてくれ、また合わさろうとされます。【成熟】は、孤立ではなく、合わさることです。

■ 【成熟の過程】～どの土台になるかは、自分の問題～

【成熟】の過程には、「道端に落ちた種」「土の薄い岩地に落ちた種」「いばらの中に落ちた種」「良い地に落ちた種」、様々な土台があります。「道端」…その辺に落ち、すぐに御言葉を持っていかれてしまいます。御言葉を大事に、しっかり持って下さい。「土の薄い岩地は」…すぐに枯れてしまいます。「岩地」…過去の事で苦しんでいませんか？「傷つけられた私」ではなく、「癒される為にいる私」です。被害者であるうちは被害を受け続けます。しかし被害は終わりました。過去にあった出来事は神様が回復し、復興しているのです。被害という岩を取り除かれなければいけません。その行為は「赦し」と「癒し」です。「いばら」…芽が出たことが奇跡なのに、あの時は、この時は、と違うものに目を向けてはいけません。自己中心な欲はないでしょうか？「良い地に落ちる」ということが【成熟】です。それは愛されている事、愛によって行動していることを理解します。罪を理解した人というのは、愛されていることをよく理解している人です。誘惑に陥らない理由は、「愛」です。

■ 勇敢に戦い抜く

1 : 5 「この命令」、1 : 18 「この命令」が合わさり、預言という彼に与えられた召しが「正しい良心に進むように勇敢に進め」と神さまに語られました。

1 : 19 - 20、パウロはアレキサンデルに苦しめられました。そして「彼らをサタンに引き渡しました。」とあります。愛の手紙なのに「サタンに引き渡した」と書いています。けれどその後「彼らに学ばせるためだ。」と書かれています。悪魔の中に進みゆく人を排除するのではなく、祈りによって学ばせるといことです。悪魔は神様の支配の中にあるからです。私たちは悪魔に進みゆく人に対して諦めそうになり、無関心になりそうになりますが、そうならないでいけません。一時悪魔に任せることがあったとしても、祈りにより必ず神が戻して下さるからです。

さいごに…

イギリスの大英帝国の位の高い人物でしたが、中国の奥地で宣教をした宣教師でした。彼の身分とは全く違う生活環境の中で宣教を続けた彼に、取材レポーターは「どのようにされていたのですか？」と質問をしました。彼は、「バイオリンは調律しなければ音が狂ってしまいます。私は朝毎に神の前に出て自分を調律するのです。毎日、自分が間違った音を奏でない様に調律しています。」と答えたそうです。正しい良心とはこのようなものです。自分で自分を調律することはできないからです。神の御言葉により自分を調律しなければいけません。自分の中で不協和音を奏でているものはないでしょうか？もしあるなら、自己中心に生きることを止める決断をしようではありませんか。孤立することを選ばず、共に成熟することを選びましょう。正しい良心を保つ為、自分を調律し続けるなら、神の前に旋律を奏でるものとなります。あなたは神様に赦され、愛されたものです。

(要約者:富岡牧)

(2022年 3月6日)